

第13期海外探検隊報告書

内容

- 1) 志望動機調査
- 2) 不安要素調査
- 3) グローバルコンピテンシー調査
- 4) グローバル人材とはどんな人？

調査時期： 2019年7月(渡航前)、9月(渡航後)

報告時期： 2019年12月

グローバル教育研究推進機構

小松 俊明 tkomat0@kaiyodai.ac.jp

派遣学生数：29名

派遣国：アジア5カ国、欧州2カ国

シンガポール・タイ・台湾・中国・ベトナム・ノルウェー・イギリス

男子9名、女子20名

低年次
学生

1年生：10名 (35%)

2年生：15名 (51%)

86
%

高年次
学生

3年生：2名 (7%)

4年生：2名 (7%)

14
%

総論： 第13期を終えて

2013年以來、海外探検隊に参加した学生は第13期までで延べ274名に至り、毎回2つのキャンパスから、多様な学科と学年の学生が参加する。最近の傾向としては、参加者の低年次化が進み、大学受験前のオープンキャンパスなどで、海外探検隊の存在をすでに知っている学生が多く、入学後、すぐに海外探検隊プログラムに応募して選抜される学生も多い。第13期でもそのような学生が、最終選抜者29名中10名に及ぶ。つまり、早い段階でTOEIC L&R 600点の進級要件をクリアした学生が、次なる挑戦として海外探検隊プログラムを捉えている。そのような学生の場合、できるだけ早い段階で海外探検隊プログラムに参加し、さらに次なる挑戦(TOEICやIELTSなどで高得点獲得に挑戦することや、語学留学や長期留学に挑戦する等)に向けて準備を進めていることがうかがえる。こうした流れをつくることは、2012年以來5年間実施した文部科学省のグローバル人材育成推進事業に本学が採択された当時の目標が実を結んでいる結果であり、大いに歓迎したい。

第13期では、2016年夏(第7期)以來、久しぶりにノルウェーのサーモン養殖企業大手であるセルマック社において、シーフードバリューチェーンを学ぶノルウェープログラム(2週間)が復活したことが、最大のトピックである。同プログラムは、三菱商事水産事業グループの全面的な支援を受け、ノルウェーのサーモン養殖企業であるセルマック社、三菱商事水産事業部、そして同グループ傘下の水産商社である東洋冷蔵社から合計5名の若手社員が同プログラムに参加した。本学の学生達が、研修期間全体にわたり現役の商社マンと長い時間を共にし、リアルな水産事業の現状を直接学べたことは大変貴重な機会であった。

第12期より、海外探検隊プログラムの従来 of 枠組みの範疇で、TOEIC L&R 600点をクリアした学生が、より高度な英語コミュニケーション能力の習得に向けて挑戦できる英語学習プログラムを開始したが、第13期でもそれを継続した。第12期ではアイルランドに2週間、そして第13期ではイギリスに2週間の英語学習プログラムを試験的に導入した。この2度にわたる英語学習プログラムは、現状では海外探検隊に過去に一度参加したことがある学生だけに応募資格を与えているが、参加を希望する者が多く、TOEIC 600点の進級要件をクリアした学生のニーズに合ったプログラムであることが確認できた。その理由は、TOEIC 600点程度では海外大学への留学を実現させるには到底及ばないこと、実際にアジアに派遣されてみて、自らの英語力がまったく足りないことに気づいたことにある。そうした学生は、早期の英語力向上に向けて、海外の英語学習プログラムに参加することを強く希望している。

海外で英語学習を行うプログラムへのニーズは、あらゆる英語レベルの学生に潜在的に存在していることが予想される。海外探検隊では今後もTOEIC L&R 600点をクリアした学生に向けた語学学習プログラムを継続して実施する。第14期ではアイルランド、そして第15期ではイギリスへ、研修期間を2週間から1か月に延長して実施する。TOEIC 600点以下の学生にも同様のニーズがある可能性が高いが、海外探検隊の枠組みの中では、その学生を対象にした英語学習プログラムは実施しない。ただし、良質な英語学習プログラムを開拓したので、将来TOEIC 600点以下の学生向けの英語学習プログラムが必要になった場合は協力したい。

アジア派遣は安定しているが、ベトナムやシンガポールにおいてプログラム内容に課題があるため、第14期に向けて、それらの課題に取り組みたい。第14期に向けた展望は後述する。

海外探検隊の歴史と現状 (派遣国:8カ国～アジア5カ国、欧州3カ国)

海外探検隊プログラム(科目名:海外派遣キャリア演習または長期学外実習(海外)、2単位)は、2013年8月に第1期派遣を2カ国(シンガポールとタイ)で同時に始めた。以来、少しずつ派遣国を増やし、年2回夏季休暇の8月と春期休暇の3月に約1か月間の海外派遣を実施してきた。

以下、プログラム開発の経緯について整理したものである。

- * 2013年夏(第1期): シンガポールとタイプログラムを開始
- * 2014年夏(第3期): 台湾と中国プログラムを開始
- * 2015年春(第4期): マレーシアプログラムを開始(第10期以降休止)
- * 2015年春・夏(第4期・第5期): ニュージーランドプログラムを実施(第6期以降休止)
- * **2016年夏(第7期): ノルウェープログラムを開始、海洋工学部学生の参加により全学展開**
- * 2018年夏(第11期): ベトナムプログラムを開始(アジア5カ国目)
- * 2019年春(第12期): アイルランドプログラムを開始(英語学習プログラム開始)
- * 2019年夏(第13期): イギリスプログラムを開始(英語学習プログラム開始)
- * 2020年春(第14期): 中国プログラムを休止(理由:香港デモの悪化)

派遣人数は、各国原則4名としている(英語学習プログラムは、アイルランドとイギリスにそれぞれ年1回実施とし、各回最大6名程度まで受け入れている)。最近は、アジア5カ国と欧州2カ国、合計28～30名(夏季・春季の年間合計は56～60名程度)の派遣者数で安定している。

〈海外探検隊派遣者数〉

(人)

派遣先	1期生	2期生	3期生	4期生	5期生	6期生	7期生	8期生	9期生	10期生	11期生	12期生	13期生	合計
	2013夏	2014春	2014夏	2015春	2015夏	2016春	2016夏	2017春	2017夏	2018春	2018夏	2019春	2019夏	
シンガポール	4	4	4	5	4	4	4	4	6	4	4	4	4	55
タイ	8	4	4	4		2	4	6	4	4	4	4	4	52
中国			4	4	3	4	4	4	4	8	8	4	4	51
台湾			2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	42
マレーシア				4	4	4	6	6	8					32
ノルウェー							4			4		4	4	16
ベトナム											4	4	4	12
アイルランド												6		6
イギリス													5	5
ニュージーランド				2	1									3
合計派遣者数	12	8	14	23	16	18	26	24	26	24	24	30	29	274

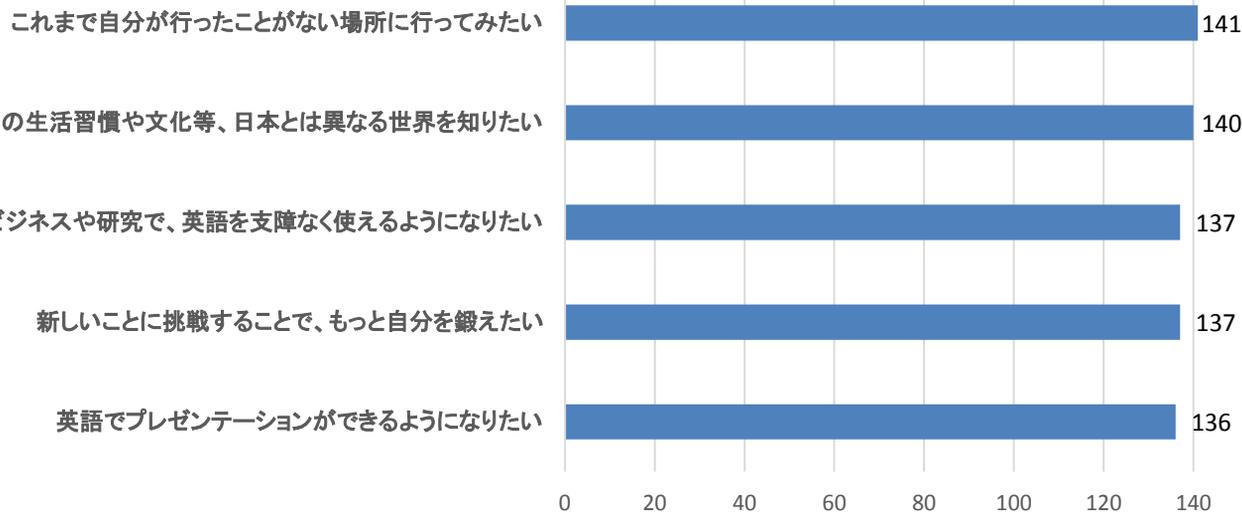
1) 志望動機調査・質問表

目的: 学生の志望動機を把握してプログラム開発に役立てるとともに、必要な指導内容を確認する。

5		4		3		2		1		
非常にあてはまる		あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		全くあてはまらない		
Motivation for Application - 志望動機			項目	Details of the Reasons for Application - 志望動機の詳細				重み(1~5点)		
Interest in Overseas - 海外への関心 -	未知なるものを知る	1	国を挙げて経済成長を実現していることに関心がある							
		2	新しい技術革新や戦略的な取り組みに関心がある							
		3	当该国が直面する社会問題への対処法について関心がある							
		4	多民族が共生する社会を形成した経緯に関心がある							
	異質なものを知る	5	これまで自分が行ったことがない場所に行ってみたい							
		6	海外の生活習慣や文化等、日本とは異なる世界を知りたい							
		7	海外企業(海外の日系企業を含む)で働くことに関心がある							
		8	海外の大学生活や学べる内容について関心がある							
Cultural Exchange - 異文化交流 -	関係性を学ぶ	9	当该国と日本との文化交流について関心がある							
		10	当该国と日本とのビジネス交流について関心がある							
		11	当该国の国民と日本人との相性に関心がある							
		12	当该国の世界とのつながりについて関心がある							
	現地で交流する	13	海外に同世代の外国人の友人を作りたい							
		14	現地で働く社会人との交流に関心がある							
		15	現地の家庭へのホームステイに関心がある							
		16	ボランティアや国際協力活動に挑戦してみたい							
Business & Research Training - ビジネス & リサーチ研修 - (派遣先に該当研修がない場合でもプログラム応募時の志望動機を反映して回答してください)	ビジネス研修	17	海外の現地ビジネスマンや日本人駐在員と話をしてみたい							
		18	会社の仕組みや業界事情、そして仕事の流れを学んでみたい							
		19	働く時間や就労意識など、日本と海外の違いを知りたい							
		20	仕事の魅力や大変なところを身をもって体験してみたい							
	リサーチ研修	21	研究活動の基本について学びたい							
		22	日本と海外の研究活動の違いや共通点を知りたい							
		23	早い段階から研究室に参加して、研究活動を経験してみたい							
		24	海外の研究テーマや手法を学び、研究の海外人脈を作りたい							
Language & Skill Development - 語学やスキル開発 -	語学習得	25	日常的に英語でコミュニケーションをとる経験がしたい							
		26	英語でプレゼンテーションができるようになりたい							
		27	ビジネスや研究で、英語を支障なく使えるようになりたい							
		28	読み書き以上に、リスニングや会話を上達させたい							
	スキル習得	29	社会人マナーやビジネスマナーを身に着けたい							
		30	いろいろな場面で有効なビジネスメールの書き方を習得したい							
		31	社会人の考え方、動き方、スピード感等を身に着けたい							
		32	グローバルな環境で仕事をするためのスキルを身に着けたい							
Growing Experience - 自己実現と成長 -	意識改革	33	新しいことに挑戦することで、もっと自分を鍛えたい							
		34	休暇期間を有効に使って、さらなる成長を実現したい							
		35	海外の大学生や社会人と交流して刺激を受けたい							
		36	グローバル社会で活躍する人材を目指したい							
	実績作り	37	海外生活を体験し、日本とは異なる環境でサバイバルしたい							
		38	海外の大学で学んだり、海外にある企業で働く経験がしたい							
		39	早い段階で海外体験をして、将来の就活等でアピールしたい							
		40	中長期の留学等、より難易度の高い挑戦への第一歩としたい							
志望動機は? (記述必須)										

13期生志望動機調査（上位5項目）

最大値145pt（5点×29名）

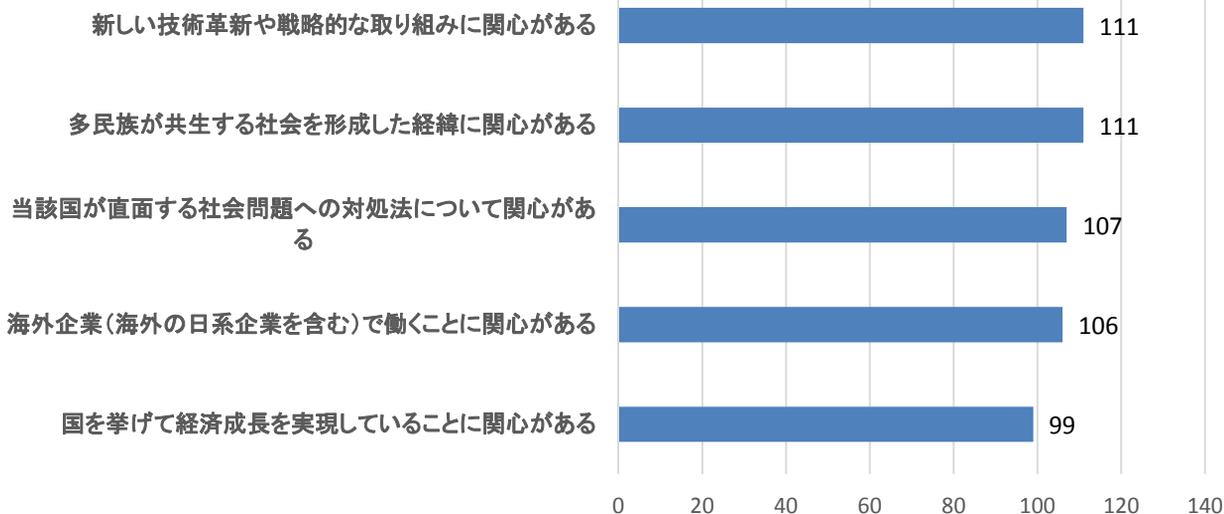


傾向

- 1) 海外体験1、2回目の学生が中心のため、まずは異文化への挑戦に関心が高い。
 - 2) 低年次学生の参加が多い中、企業や研究体験等の早期教育(先取り)に高い関心を示している。
 - 3) 英語力プラスアルファ(英語プレゼン力等)習得への関心が高く、総じて自分を鍛えたい学生が多い。
- 低年次のやる気の高い学生が参加者に多く、先取り教育への関心や苦手克服への意識が強い。

13期生志望動機調査（下位5項目）

最大値145pt（5点×29名）



傾向

- 1) 派遣国の歴史や特殊事情等に対する知識や関心が、応募時点では十分に醸成されていない。
 - 2) 将来グローバル企業で働き、海外駐在したいという、海外志向が学生の間で強いわけではない。
グローバル時代を意識している学生でも、将来のキャリアの選択で海外志向が強いとは限らない。
 - 3) グローバルな社会問題や多民族の共生(移民問題)等、現代社会が抱える問題に目が向いてない。
- 目先でやるべきことの意識はあるが、それが自分自身の長期ビジョンに基づいていない。

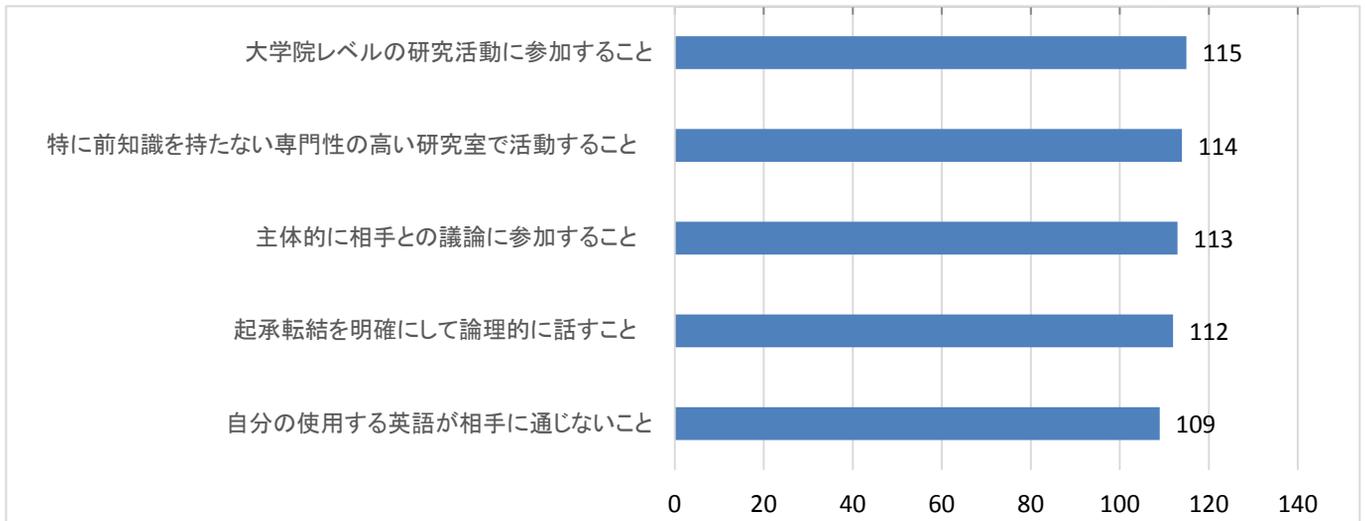
2) 不安要素調査・質問表

目的: プログラムに参加することを希望した学生が、不安に感じている内容を事前に把握する。

5	4	3	2	1
非常にあてはまる	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
Anxiety Elements - 不安要素		項目	Details of the Reasons for Anxiety - 不安要素の詳細	重み(1~5点)
Living Overseas - 海外滞在への不安 -	海外経験	1	気候や食べ物が違う場所に行くこと	
		2	過去に行ったことがない場所に行くこと	
		3	治安・交通事情・文化・価値観などが違うこと	
		4	物理的に日本から遠く離れていること	
	自立経験	5	親元から長期間離れて生活すること	
		6	食事や健康管理を自分の責任で行うこと	
		7	知らない者同士で集団生活をする	
		8	洗濯や炊事など身の回りの世話を自分でやること	
Language - 言語への不安 -	コミュニケーション	9	海外大学や企業など、主に英語を使うこと	
		10	読み書きよりも、聞く・話す能力が必要であること	
		11	自分の使用する英語が相手に通じないこと	
		12	主体的に相手との議論に参加すること	
	プレゼンテーション	13	外国人の前で英語でプレゼンすること	
		14	起承転結を明確にして論理的に話すこと	
		15	聴講者が関心を持つテーマを選ぶこと	
		16	原稿を手を持つことなく、英語で成果報告を行うこと	
Knowledge & Experience - 知識と経験への不安 -	専門知識	17	ビジネスマナーや社会の一般常識を理解すること	
		18	経済情報や企業活動に関する一般常識を理解すること	
		19	特に前知識を持たない専門性の高い研究室で活動すること	
		20	大学院レベルの研究活動に参加すること	
	社会経験	21	毎日規則正しい時間に通勤・通学すること	
		22	社会人と一緒に長い時間を過ごすこと	
		23	相手の仕事を邪魔したり、失礼がないこと	
		24	組織の信用を失墜させるような迷惑をかけること	
Interpersonal Skill - 人間関係への不安 -	対人関係	25	初対面の相手とも自ら相手に近づいて仲良くすること	
		26	世代の異なる社会人を相手と積極的に話をする	
		27	自分とはタイプの違う海外の学生とも交流をすること	
		28	自分だけが外国人という場面でも積極的に輪に入っていくこと	
	集団生活	29	海外で1か月間の集団生活をする	
		30	生活習慣や意見の相違を相談して解決すること	
		31	一人になれる自由な時間があまりないこと	
		32	相性が合わない相手と長時間一緒にいること	
Personality & Attribute - 性格と特性への不安 -	自己管理	33	失敗して落ち込んでも気持ちを切り替えること	
		34	規則正しく睡眠をとり、体調管理をしっかりと行うこと	
		35	日報・メール対応・プレゼン準備などを遅延なく行うこと	
		36	約束の時間に遅れることなく、時間管理を徹底すること	
	参加意欲	37	常に前向きに考えて、どんなことにも積極的に参加すること	
		38	事前に予習したり、準備を行うことで、学びを最大化すること	
		39	損得だけでなく、経験値を高めるために活動的になること	
		40	苦手なことでも、臆することなく挑戦してみること	
不安要素は？(記述必須)				

13期生不安要素調査（上位5項目）

最大値145pt（5点 x 29名）

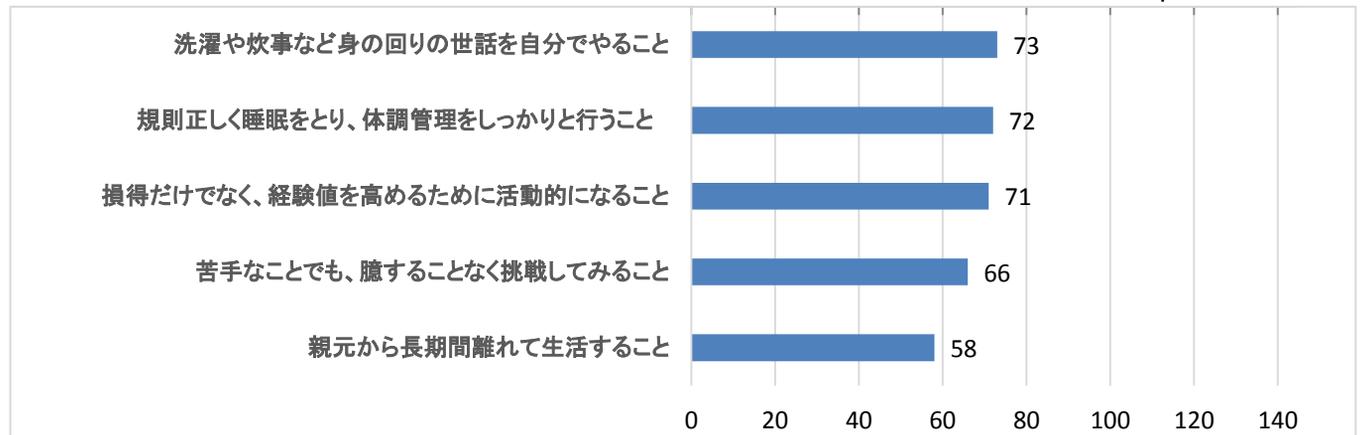


傾向

- 1) 研究体験の先取りを希望する学生は多いが、反面、未経験の研究活動への不安を抱えている。
 - 2) 英語力への不安、論理的な討論をすることへの不安を抱えている。
- 優秀な海外学生や社会人との交流に期待半分、不安半分な様子が見て取れる。専門的な研究に取り組む大学院の研究室に配属されることにも、学生達には不安と期待がいり混じっている。

13期生不安要素調査（下位5項目）

最大値145pt（5点 x 29名）



傾向

- 1) 親元から離れて自立した生活を1か月間送るに対する不安は少ない。
 - 2) 仕事体験や研究体験等、初めての経験となる研修内容が多いが、先取り体験を希望している学生が多いゆえに、初めての体験をすることへの不安はそれほど目立たない。
- 一人暮らしの学生ばかりではないが、親元から離れた海外生活に不安を感じない学生も多い。一方、熱帯のアジアへの夏季派遣であるため、気候や食事の違いなど、体調管理への不安を気にする学生が散見された。

3) グローバルコンピテンシー調査・質問表

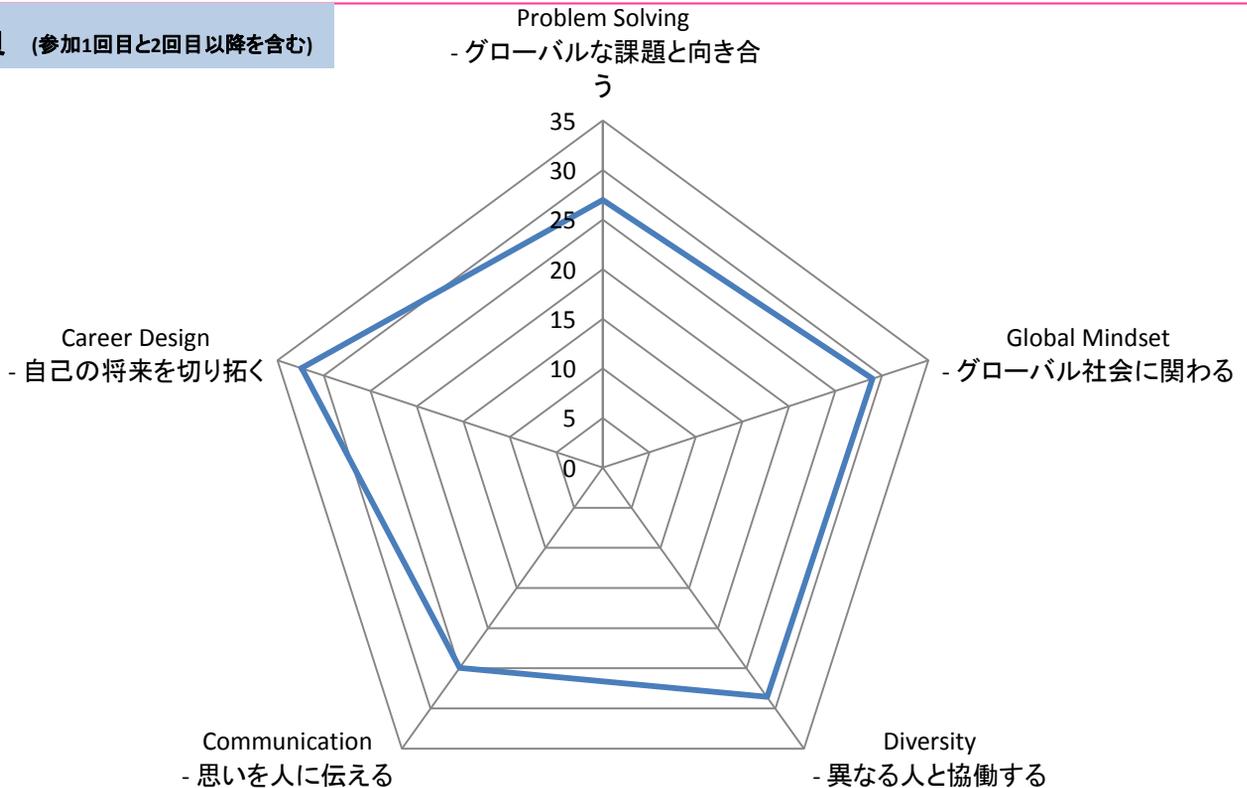
目的: グローバル人材に必要なスキルや意欲を現時点でどの程度有しているかを自己評価する。

5	4		3	2	1
非常にあてはまる	あてはまる		ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
Global Competency - グローバル人材の基礎能力			項目	Self Evaluation - 自己評価項目	
				重み(1~5点)	
Problem Solving - グローバルな課題と向き合う -	課題を発見する力	1	計画を立てて行動することができる		
		2	新しいアイデアを考えることが好きである		
		3	何事も自分が最初に始めることが多い		
		4	現状を分析し、課題を明らかにして提案することができる		
	論理的・批判的に考える力	5	世界の出来事について、家族、友達、先生等とよく話をする		
		6	なぜそうなるのか、物事を掘り下げて考える習慣がある		
		7	疑問点が出てきたら、インターネットや書籍等ですぐに調べる		
		8	1つの視点でなく、複数の視点から物事を考える習慣がある		
Global Mindset - グローバル社会に関わる -	新しい経験への積極性	9	新しく始めたことは、たいてい最後までやり遂げる		
		10	世界の出来事について関心が高く、いつも情報収集している		
		11	世界にある未知の土地について、色々調べるのは楽しい		
		12	未知の分野や土地に積極的に飛び込んでみたい		
	冒険心と危機管理	13	新しい環境に行ってもあまり緊張せず、何とかやっつけていける		
		14	異なる環境にも早く順応し、新しい友人を作ることができる		
		15	思うようにいかない場合でも、自分は我慢できるほうである		
		16	必要に応じて、リスクをとることができる		
Diversity - 異なる人と協働する -	多様性の受容力	17	異なる文化や慣習に関心がある		
		18	自分と違う考えや行動パターンを持つ人とも仲良くしている		
		19	外国人を含め、知らない人ばかりの集まりに入っていける		
		20	同じ人とばかり付き合うのではなく、学内外に人脉が多い		
	協同して課題を解決する力	21	目的に向かって、周りの人を動かしていくことができる		
		22	全体を考えて、仲間に助言や注意することもできる		
		23	自分の役割に責任を持ち、周りにも協力することができる		
		24	グループの中で、効果的に仕事をしてチームに貢献できる		
Communication - 思いを人に伝える -	情報を発信する力	25	相手の考えを引き出して、よく人の話を聞くことができる		
		26	自分の考えをまとめて、わかりやすく説明することができる		
		27	人前で話をすることや、司会をすることができる		
		28	定期的に情報発信をするメディアがある		
	母国語以外の言語で伝える力	29	自分の考えを異なる言語(英語等)で相手に伝えられる		
		30	語学力の向上に向けて継続的に勉強している		
		31	自分の考えを英語でプレゼンテーションすることができる		
		32	英語以外の第二外国語にも挑戦する必要があると考えている		
Career Design - 自己の将来を切り拓く -	グローバル化に向けた意識	33	海外の人とコミュニケーションする機会を増やしたい		
		34	世界の情勢に高い関心がある		
		35	将来は海外出張や駐在に積極的に挑戦したい		
		36	日本企業や公務員等ではなく、グローバル企業で働きたい		
	グローバル社会に貢献する志	37	グローバルに共通した課題(水、食料、資源等)に関心がある		
		38	グローバルに共通した課題の解決に関わる仕事がしたい		
		39	世代を超えて、海外に広くネットワークを築きたいと思う		
		40	海外で知り合った人とは、今後も末長く交流を続けたい		

グローバル人材とは？ (記述必須)

13期生グローバルコンピテンシー調査（渡航前1ヶ月以内に実施）

全員（参加1回目と2回目以降を含む）



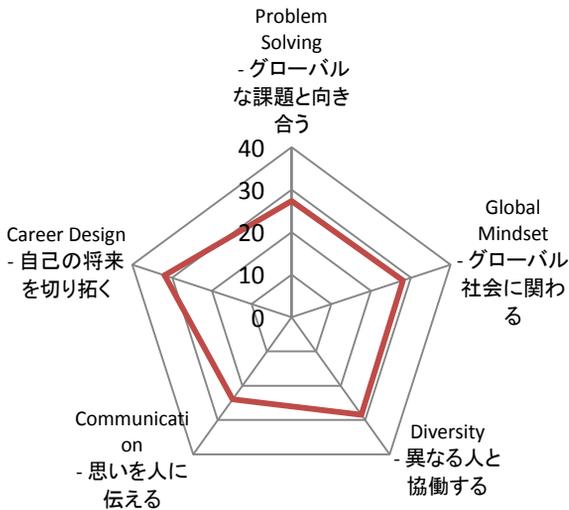
特徴

- * 「思いを人に伝える(コミュニケーション能力)」及び「グローバルな課題と向き合う」の2項目に対する自己評価が目立って低い数字が出ている。英語力向上に加えてプレゼン能力や論理的な思考を鍛えることに対して、海外探検隊プログラムには毎回参加学生から期待が寄せられている。品川と越中島の異なる学科出身者が一緒にプログラムに参加できることを参加理由にあげる学生も多く、異なる専門分野の学際的な関連性を理解することが重要であると意識している学生がいることがうかがえる。
- * 第13期の参加学生29名中10名が1年生(2年生は15名)であるが、海外探検隊への参加を希望する低年次学生の特徴としては、自分の課題を早期に認識しており、それを大学生活の早い段階で克服することを望んでいる傾向がある。
- * 低年次学生に共通しているのは、自分の力で将来のキャリアを切り拓きたいという強い意志があることである。

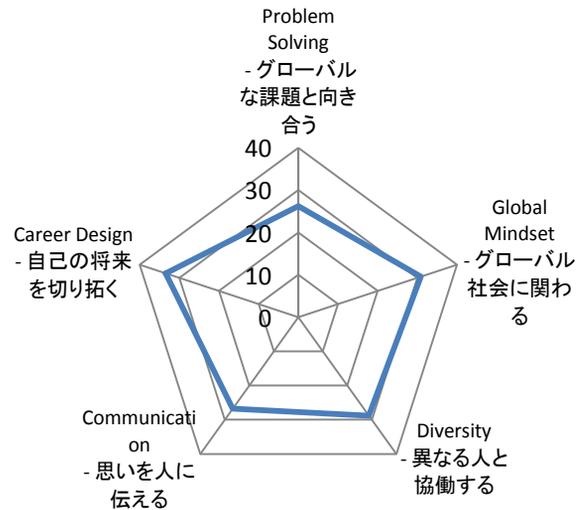
帰国後、1カ月以内(2019年9月頃)に再度同内容のアンケート調査を実施予定
(海外探検隊プログラムに参加後、自己評価にどのような変化が起きたかを測定)

13期生グローバルコンピテンシー調査（渡航前1ヶ月以内に実施）

参加1回目の学生



参加2回目の学生



特徴

* グローバルコンピテンシーに対する自己評価は、参加1回目の学生と2回目の学生とでは、その傾向には

大きな違いは見られないが、1回目の参加を踏まえて自信をつけ、総じて自己評価は高くなっている。

* 2回目参加の学生には、海外探検隊への参加に対するより強い目的意識が強まっている。その目的意識は主に以下の5種類に分類されることから、それらの学生の要望に応えるためのプログラムを用意し、それらのプログラムに適宜配属させるような配慮を行っている。

- (1) アジア以外の国への派遣を希望する学生がいる → 現状: ノルウェー、イギリス、アイルランド
- (2) より多くの時間で研究体験がしたい学生がいる → リサーチプログラムに参加させる
- (3) より多くの時間で仕事体験をしたい学生がいる → バリューチェーンプログラムに参加させる
- (4) もっと英語力を格段に向上させたい学生がいる → 英語学習プログラムに参加させる
- (5) リーダーシップ育成や自己啓発を望む学生がいる → リーダーに指名し後輩指導を経験させる

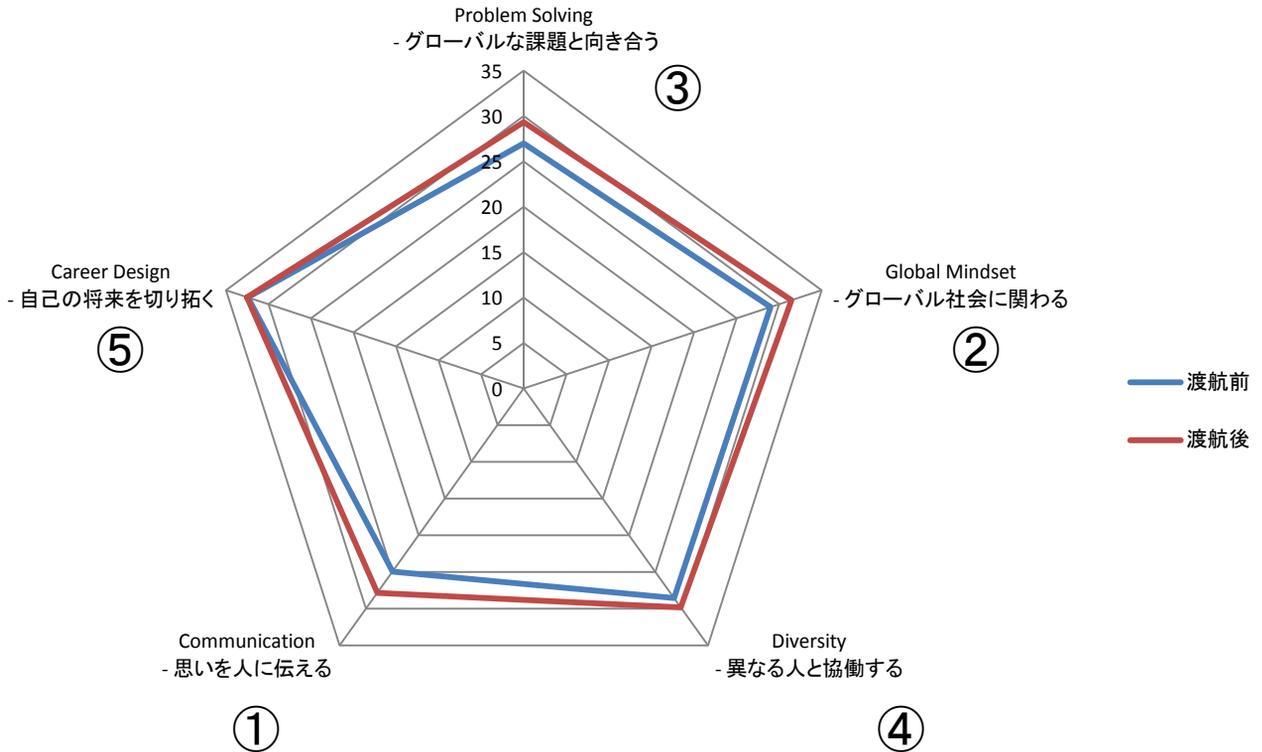
帰国後、1カ月以内(2019年9月頃)に再度同内容のアンケート調査を実施予定

(海外探検隊プログラムに参加後、自己評価にどのような変化が起きたかを測定)

13期生グローバルコンピテンシー調査（帰国後1ヶ月以内に実施）

全員（参加1回目と2回目以降を含む）

渡航前後の比較



○数字は渡航後の数値の上昇率のランキング

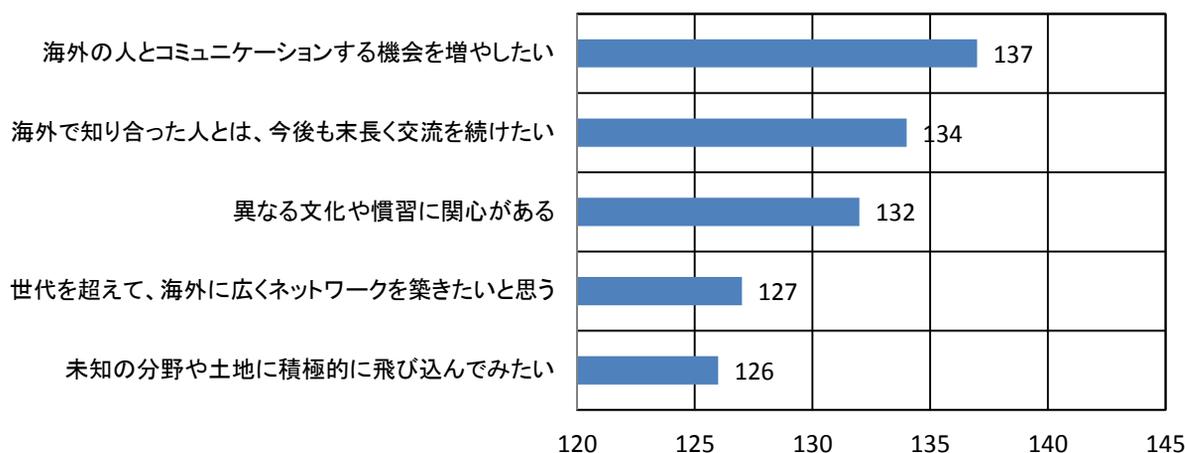
特徴

* 渡航前調査で数字が高かった、「自己の将来を切り拓く」が渡航後調査でも一番高い数字が出ているが、渡航後の伸び率は低い。一方、渡航前調査で数字が低かった「思いを人に伝える (Communication)」及び「グローバルな課題と向き合う (Problem Solving)」の項目の数字が比較的伸びている。全体的に、自分の将来のキャリアを開拓したいという思いは強いまま、具体的なツールとしてのコミュニケーション能力と、現地で培われた、課題へ取り組む力や提案力が身に付いたと伺える。

* 「グローバル社会に関わる (Global Mindset)」の項目においても、5項目のうち二番目に伸び率が高い。渡航先で新しい経験をしたことで、未知の分野の学問や体験に対しての積極性が得られたと評価している傾向がある。

13期生グローバルコンピテンシー調査（上位5項目・渡航前）

最大値145pt（5点×29名）

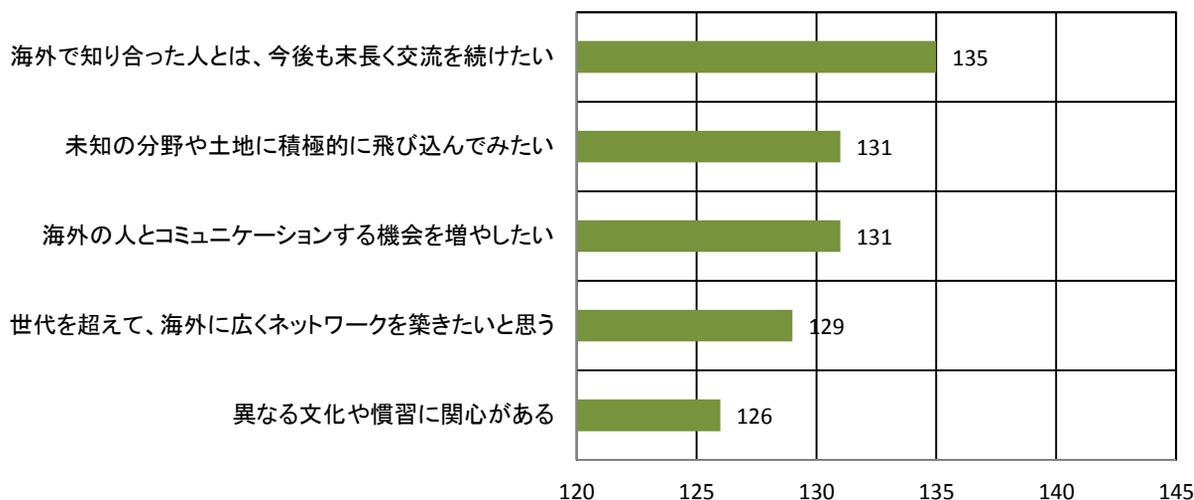


傾向

- 1) 海外に知り合いのネットワークを作り、コミュニケーションを取ることに對する意欲が高い。
 - 2) 未知の世界に対する関心があり、異文化理解には積極的な姿勢がある。
- 異文化理解や交流、そして仕事や研究の先取り経験を希望する背景には、既存の大学生活の中ではグローバルコンピテンシーを育成する機会があまりないことに学生達がつづいていることがあげられる。

13期生グローバルコンピテンシー調査（上位5項目・渡航後）

最大値145pt（5点×29名）

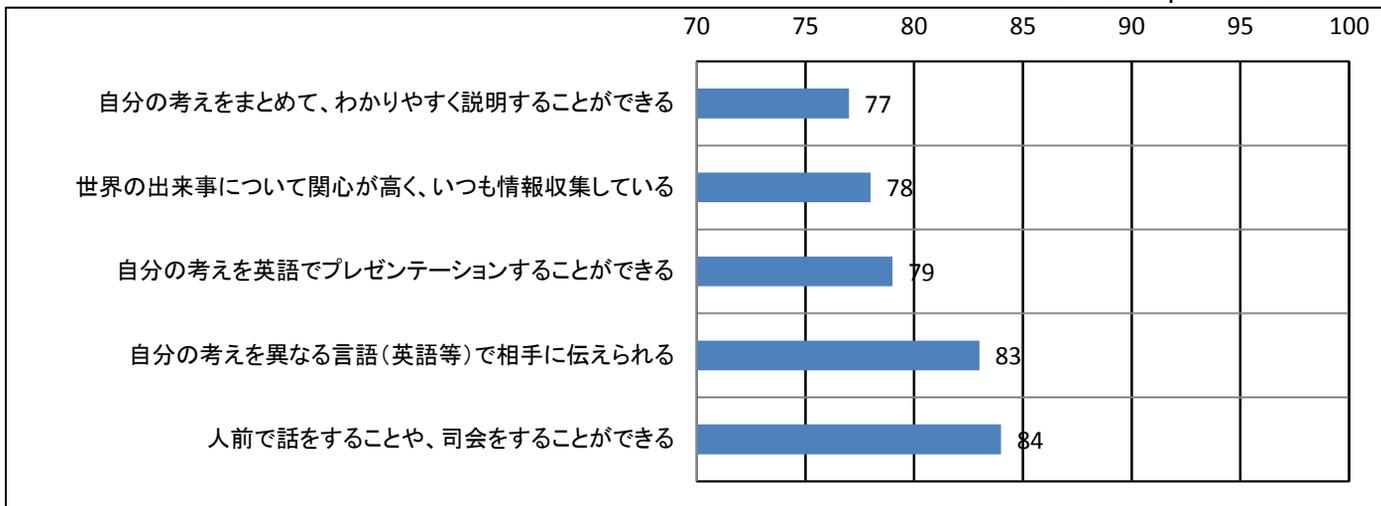


傾向

- 1) 渡航前の、「海外の人とコミュニケーションをする機会を増やしたい」という項目が依然高く、現地での活動の結果、構築できた人間関係を継続させたいという思いが強く芽生えた学生が多い。
- 2) 研修中に得られた経験から、自身の専攻以外の分野にも興味を持ち始めた傾向があげられる。

13期生グローバルコンピテンシー調査 (下位5項目・渡航前)

最大値145pt (5点 x 29名)

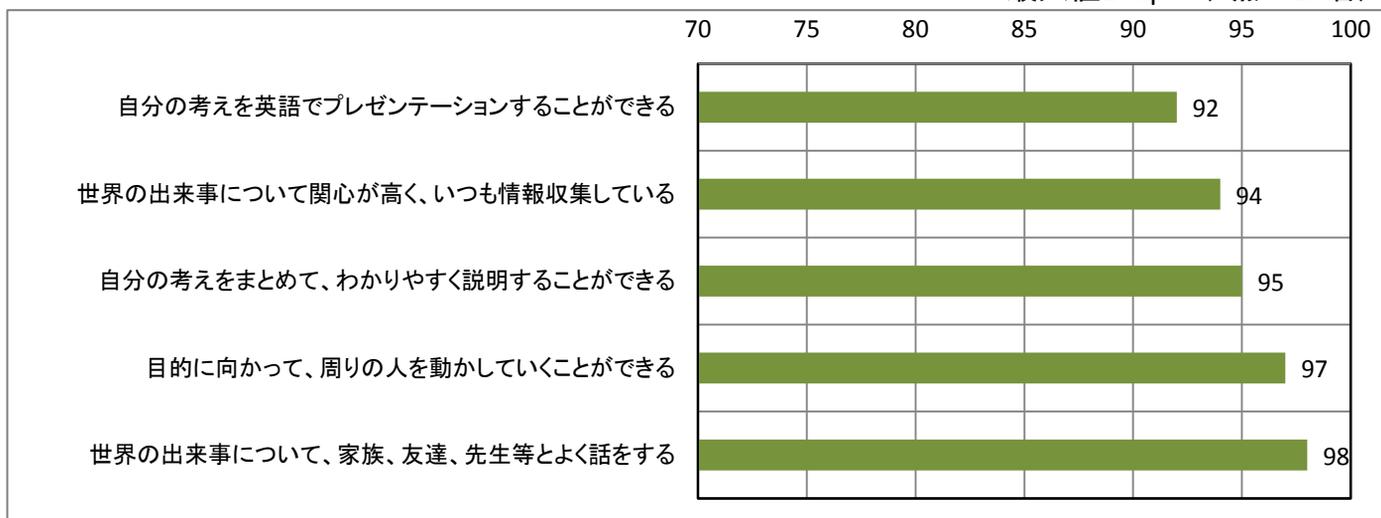


傾向

- 1) 英語力不足にとどまらず、総合的なコミュニケーション能力に関する苦手意識が強いことが明らか。
- 2) 世界の出来事に関する情報収集が足りず、知識に基づいた自らの意見を持ち合わせていない。
→ 実際、渡航中に海外大学生との議論になった時、日本人学生が目立って意見を言えないのは、これらの要素が背景にあるのではないかと推測される。

13期生グローバルコンピテンシー調査 (下位5項目・渡航後)

最大値145pt (5点 x 29名)



傾向

- 1) 全体的に、自己評価の底上げがされている。
- 2) 渡航後最下位になった項目については、現地で実際に行ったプレゼンの結果、その自己評価に基づいているものと推測される。
- 3) 世界の出来事に対して情報収集が十分でないという意識は、渡航後に一層高まっている。

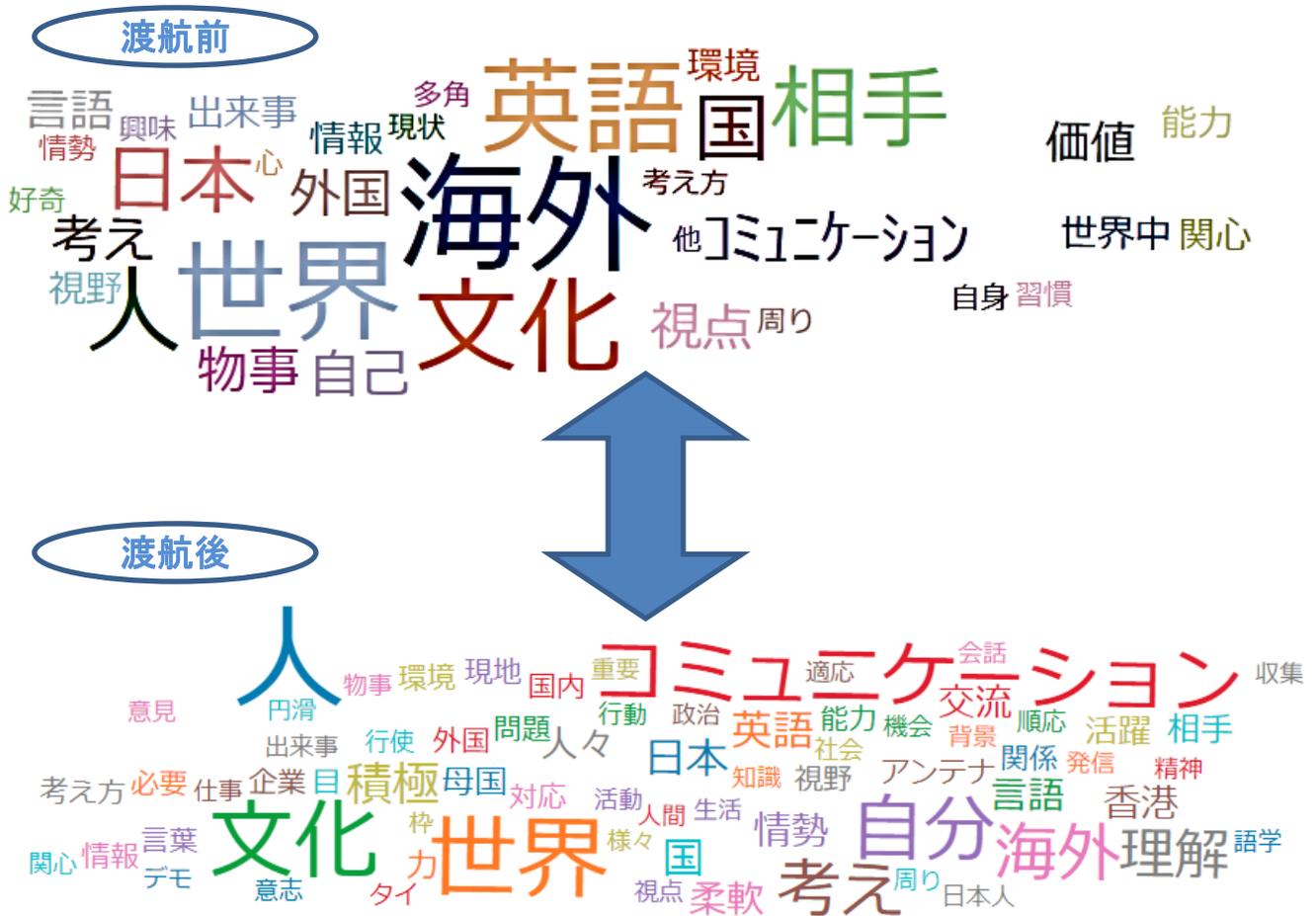
4) “グローバル人材とはどんな人？”

目的： 目指すべき「グローバル人材像」が、海外体験でどのように「具体化」したかについて把握する。

調査方法

学生が自由記述した志望動機の頻出キーワードを抽出。2回以上使用された単語100語を選択し、その中から使用頻度が多い単語をより大きく表示することでわかりやすく可視化した。

渡航前と渡航後の比較



渡航前後の変化

学生達が、将来目指す人物像の輪郭がより明確になっていることをうかがわせる結果が出ている。その根拠として2つあげたい。第一に、学生達の頻出ワード総数が明らかに「多様化」している点を指摘したい。渡航前の頻出ワードは、学生によるグローバル社会の見方、とらえ方が単一的であったのに対し、渡航後の学生が編み出すグローバル人材像の内容には、より具体的で多様なボキャブラリーが使用されるようになってきていることが上記の結果を比較することで明白である。

第二に、渡航前の頻出キーワードのトップ5が「海外、世界、英語、文化、相手」であったのに対し、渡航後の頻出キーワードのトップ5は「人、世界、コミュニケーション、文化、自分」となり、「英語」「海外」というキーワードが消えたこと、「コミュニケーション」への注目が高まり、さらには「相手」という言葉ではなく、「自分」という、主体性を想起させるキーワードに切り替わったところにも注目したい。

“グローバル人材とはどんな人？”



調査方法

学生が自由記述した志望動機の頻出キーワードを抽出。2回以上使用された単語100語を選択し、その中から使用頻度が多い単語をより大きく表示することでわかりやすく可視化した。

主な学生コメント

何気ない会話や一般的な物事の対しても、世界規模で考えることができる人材。異なる文化からの見え方、考え方を意識しながら行動する人材。世界に対して日本、自分の考え方を説明できる人材。

グローバル人材とは、世界の出来事に関心があり、世界社会の諸問題に対して自分なりの意見を述べ批判できる人のことを指す。自国や自分を中心に考えるのではなく、自分を世界の一部として全体を捉えることのできる人。

英語力があるだけでなく、海外の違う文化を持った人とコミュニケーションをする能力があること。また、物事を世界の広い視点で考えることのできる能力。特に、日本人と話すのと変わらないような態度で海外の人と抵抗なく話せる人のことだと思います。

外国のコミュニティ、ネットワーク、カルチャーを理解し、自己発信ができる人材のことであると考えている。大切なのは自己発信ができるということだ。英語が話せるだけではダメなのである。会話や関係性というものには双方性のあるものでなければならない。文化的に異なる人と接する上で、相手を理解するためには会話は必要不可欠である。お互いの関係性を深めるために相互に意思を疎通し、しっかりと自己発信をすることでこそ信頼が得られるのではないかと感じる。

総論： 第14期に向けて

海外探検隊プログラムは、ガラパゴス化した日本の教育界の画一的なグローバル時代の捉え方やグローバル教育論とは一線を画し、ボーダーレスに発展をつづけるグローバルな企業社会からの人材育成に対する要請や、グローバル人材を目指したい優秀な若者のニーズに応えることをミッションとして、常に先進的な取り組みに挑戦し、骨太な内容の人材育成プログラムの開発に挑戦している。

その実現のために、海外探検隊プログラムがベンチマークしているのは、シンガポール国立大学や台湾大学で実現しているグローバル人材育成に向けた海外派遣プログラムである。また、海外学生の受け入れにおいては、タイのチュラロンコン大学、マヒドン大学、タマサート大学等で実現している多様なインターナショナルプログラムにも注目している。

欧州の非英語圏では、本学が提供する専門分野との相性が良いノルウェーの大学におけるインターナショナルプログラムにも注目している。英語学習プログラムについては、アイルランドとイギリスで、特に評判のいい中小規模の大学を選び、コストも比較的安く、かつ質の高いプログラムを継続的に提供することを目指す。

以上の全体方針を踏まえ、海外探検隊プログラムは、引き続きアジアや欧州のパートナー大学との関係をより深めながら、グローバル企業との連携を模索しつつ、各地で先行する世界のグローバル人材育成プログラムと肩を並べられるよう、今後もプログラムの質向上を目指していく。日本固有の事情にとらわれず、グローバル時代らしく、いろいろな面で先行するグローバルな大学が関心を持つような、独自性のあるユニークなプログラム開発を目指す。

第14期海外探検隊の実施において、一つの重要な決断をした。それは中国プログラムを一時休止することである。過去10回にわたり、複数のグローバル企業や現地の総領事館、そして香港大学と香港理工大学の協力を得て大変充実したプログラムを継続的に実施してきた経緯があるだけに苦渋の判断であった。現地からの情報を直接入手し続けてきた結果、香港の情勢が混迷を深めていることを憂慮した結果である。

研修を受け入れてくれている企業の多くは、経営者の賛同を得たことでプログラムの実施に至っているが、受入れ窓口の方々の交代等に伴ってプログラムが継続できなくなることがあるため、常に学生の研修先は一定の周期で見直し、新たな開拓を必要としている。

第14期は、タイと台湾、そしてベトナムはリサーチプログラムとして、パートナー大学での研究室研修が中心となる。シンガポールはキャリアプログラムであるが、養殖企業での研修に加え、新たに海運の企業での研修が加わる予定である。アイルランドの英語学習プログラムは、従来の2週間から期間を延長して1カ月間で実施する。3月のノルウェープログラムでは、氷点下の北極圏に訪問し、“Sustainable Arctic Living”をテーマに独自のアクティビティをする。

Tokyo University of Marine science and Technology
Global Education and Research Office

海外探検隊



東京海洋大学 グローバル教育研究推進機構

代表電話番号 03-5463-0816